

留学僧を取り巻く異文化

ニューヨーク州立大学 伊藤 博

留学僧とは

近年、仏教の国際化という言葉が耳にしますが、少し時代錯誤の感があります。インド北部に発祥した仏教は南はスリランカ、北は蒙古、東は日本、西は中央アジアにまで及んだのは正に紀元前から始まった仏教の国際化でした。但し、欧米での禅やチベット仏教の普及に代表される仏教熱は国際化の現代版と言えるでしょう。ごく少数の人々に限られておりますが、欧米の仏教の研究と実践は明らかに新鮮味があり、一考に値します。横浜善光寺留学僧育英会もアジア

に限らず、欧米にも派遣し、更に外国からも留学僧を受け入れていきます。仏教界でも世界の幾多の宗教家達と一堂に会し、相互理解を深めたり共通の問題の解決に取り組んでいます。キリスト教が西洋社会の独占ではない様に、仏教が東洋人だけの宗教ではないという意味で仏教が地球的規模でしかも人間一人ひとりの宗教として取りあげられています。

文献や各種のメディアを通じて国内にいても海外の仏教を学ぶことはできます。しかし、現地に行き肌で体験する方がより理解と呼吸が深まります。日本は仏教学の宝庫ではありますが、

ほかのアジアの国々にはパリーイ語やチベット語等による文献、更に、米国シアトルのワシントン大学やスイスのローザンヌ大学のインド仏教後期の研究の様に、欧米にも貴重な文献や仏教の研究があります。また、外国の研究者達から直接学んだり意見の交換をすることも出来、留学の効用は大と言えます。

日本の留学僧制度は長い歴史を持っています。六世紀後半に伝来した仏教は中国や朝鮮半島への留学僧たちに負うところが大きいです。留学僧達は經典の翻訳は解釈を通じて仏教学の向上に、また大衆への伝導布教にも貢献してきました。さらに、留学僧自身が海外で得た知識や体験を帰国後、宗教の枠外でも異文化の紹介に一役買い、広く文化の交流に貢献してきました。

世界の類似性と多様性

留学僧を取り巻く世界の宗教や文化は、その

同一性と多様性が交差し複雑に絡み合っています。一方では、情報網や交通機関の発達のお陰で、世界は小さくなったと言われます。人間はどこに住んでいてもかなり共通の行動をします。衣食住という最小限の日常の活動から人類社会を維持し発展させるといふ高度な活動に従事しています。精神活動にしても、自然教を始めとする素朴な原始宗教から複雑な現代宗教まで多種多様ですが、その根底には共通点があると思います。生きる喜びと不安、死や未知の世界に対する恐怖、そして神や超自然的な現象に対する好奇心、慄きと崇拜、そして愛と敬虔な気持ちは宗教心を引き起こす原因と考えられます。この様な気持ちは人類共通の特性で、無宗教者も含めて多くの人が宗教乃至はそれに似たものに生きる拠り所を求めるわけです。

他方、世界は広く、空間的にも人間は個々の文化に縛られ、多種多様です。人間の行動範囲

は比較的狭く、日常の行動様式も限定され、各地域の風俗、習慣そして宗教は習慣化されています。宗教は一義的に定義できませんから、世界に至る所に多種多様の宗教が存在するわけです。仏教の発祥地である北インドやネパールは今ヒンズー教ですし、インドには多数の回教徒もおります。同様に欧米でも色々のキリスト教派のほか、同じ神を信ずるユダヤ教と回教が深く浸透しています。

仏教にしても、国境を越えて伝播された仏教は行く先々で形を変えました。東南アジアを中心とする南方上座部は戒律も厳しく寺院や仏像の建築色彩は大乗仏教の日本人に強烈な印象を与えます。チベット仏教も一種独特です。ミャンマー（ビルマ）では、葬儀は死者の親戚と隣人で行い、僧侶は参加しません。もともと日本でも江戸時代以前はお寺は葬儀に関与していませんでした。隣の韓国では儒教が国の宗教とし

て栄えたことがあり、今でも仏教の葬儀に影響を与えています。

カナダのモントリオールの仏教会での例ですが、キリスト教会で毎日曜日行なう礼拝のように、寺の檀家は仏教の「教会」に集まり、「賛美歌」を合唱し、仏教の「牧師」が礼拝と説法をします。参加している二世、三世の日系信者には何の違和感もないらしく、日本国内の神仏混合同様、キリスト教の儀式との類似には驚かさず。

留学僧は宗教以外の文化にも接し、異宗教とその文化との相関関係も見ることでしょう。日本では子供の頭を撫でて誉めるのが習慣ですが、タイ国では頭は一番大切な所で手で触るのは大変失礼なことだし、サウジアラビアでは椅子などに腰掛けていて、膝などを組んで他人に足の裏を見せるのはご法度です。西洋では親子や友人の間で「アイラブユー」と言うのは日常

茶飯事です、日本人には少し抵抗があるかも知れませんが、

絶対神の文化と日本の宗教

神の觀念の無い仏教徒の日本人留学僧にとつて、神を絶対視しているキリスト教、ユダヤ教、そして回教の人達の行動様式を理解し難いかも知れません。日本の神道は日本の起源や天皇制を盛り込んだ国粹主義的な思想で、そこに出てくる神はほかの原始宗教同様、諸々の物体に宿つておる自然神であり、キリスト教や回教の絶対神とは区別されています。神が宇宙と人間を創造し、人間の行動を規制する場合、信仰する者は聖書やコーランの教えが善悪の基準となり、白黒をはつきりさせます。日本人は時折自分の宗教が何かを問われて返答に困ります。躊躇し、知らないとか、何も無いと答えて相手から軽蔑されることもあります。神の觀念の無い

日本人はどこから善悪の基準を得るのかを素朴に問うわけです。

日本人はよく無宗教だと言われますが、日本人に宗教がないとか、善悪の判断がないということではなく、日本人は善悪の判断を宗教に求めないということです。特に、戦後、国教としての神道がなくなり、宗教教育が禁じられた結果、特定の宗教を倫理道德の基準としたがりません。日本人の思考様式が仏教や神道の様な特定の宗教に基づかず、儒教や仏教も含めた東洋文化や伝統それに西洋からの価値判断が複雑に絡み合つて日本人の行動に影響しており、これを単純に一つの宗教に帰することが出来ないことにもよります。

神が善悪を定め、人間の行動の規範を示すと信じる者は日本人には極端に思えるほど自己表現が断定的になりがちです。これは欧米の個人主義の影響でもあります。儒教の思想の強い日

本では、本来家族が最小の単位として家全体の福祉と和の精神を重んじ、家族の一人ひとりの自由や意見は二の次にされてきました。欧米ではフランス革命やアメリカの独立戦争を契機に個人の人権が最重要視され、大衆の中でも個人は自分の意見をはっきり言う伝統が生まれました。

留学僧への期待

絶対神を信じ自己の意見を主張する宗教は、相手との対立を深め争いになることも多々あります。古くは十字軍とアラブ軍との宗教戦争、現代ではアラブ・イスラエル戦争、イラク・イラン紛争そして北アイルランドの内紛等たくさんあります。それに反し、曖昧な玉虫色の日本の表現と物の考え方は意志の伝達に誤解を招く虞があります。それと同時に、仏教の中庸や柔軟性は宗教間の融和を生み出すのに一役買うと

もいわれます。神道が国粹的で社会統制を目的にしているのに反し、仏教は宇宙や人類の起源を自然科学に任せ、専ら個人の精神面と行動に焦点を当て修養を説いている点で、全ての宗教に共通な慈悲や愛の観念を通じて、人間共通の精神問題を地球的規模で探求するのに適しているともいわれています。そうだとすると、仏教の留学僧がより大くの人に仏教の内容を紹介する必要があるとあります。但し、この事は仏教に改宗させる事とは異なります。留学僧は伝道師ではないですが、留学先で伝導する機会もあるでしょう。その時は地味に一对一で相手の思考様式や価値観を十分理解して対話すべきでしょう。西洋の個人主義は聞いている側の自己主張も重要視するので、一方的な説法はあまりなじみません。禅問答でも一義的な答えよりは、複数の答から相手に選ばせるのも一つの方法でしょう。

留学僧は欧米の合理主義と福祉活動にも気付くでしょう。中世期のヨーロッパで起こったキリスト教宗教革命は富と宗教との問題に取り組みました。それまでは金儲けは罪と見なされ、ひたすら信仰を通じて直接神に仕えるように説いておりましたが、宗教革命家の一人であるキヤルバンは、合法的な手段で富を得ることはその富を神のために使う限りは罪ではないという新しい解釈を広め富の蓄積を正当化しました。経済活動は躍進し、西洋の資本主義の発展につながりました。これはボランティア活動にも反映されています。日本のボランティア活動は短い歴史しかありませんが、欧米では個人の自由な意志に基づいて公共団体とは無関係に大規模に行なわれます。さらに、布教活動もその延長線上にあります。キリスト教の伝導活動はよく知られており、宣教師にとって神の教えと西洋の価値観は一体化し、長年未開発の奥地を始め

世界津々浦々に布教し福祉活動に携わってきました。

日本も含め東洋にもキリスト教と西洋文明の優越性を信じる人がいます。韓国人の三分の一はキリスト教信者ですが、キリスト教への改宗の裏には西洋の文化生活への憧れがあるそうですが、動機は別として、日本人の間にはほとんど浸透しなかったのとは対照的です。同時に、半パーセントの日本人キリスト教信者の多くが知識階級であることも見逃せないでしょう。インテリ達は葬式仏教を非難し、知的な拠り所としてより理想的と思われるキリスト教に走ります。彼らにとって聖書は宗教を理論的体系的に説明しており、教会での日曜礼拝や聖書研究会を通じて聖書に対する造詣を高めようとしています。

西洋の国でも同じような現象が見られます。既存のキリスト教や他の宗教に不満を抱き教会

を去り、冠婚葬祭以外は宗教に疎遠になる人たちが大勢おります。その内の少数の者は他宗教に魅せられます。彼らにとって回教やヒンズー教や仏教は東洋の神秘的で新鮮な思想と写り、知的欲求を満たしてくれます。精神修養や人生哲学としてお寺に通ったり入門して修行に入ります。故前角博雄老師のような仏教の伝道師が対象としたのは主に、欧米のこの少数のインテリの不満分子であり、彼らの次の世代の仏教徒の育成が楽しみです。

日本人の宗教観

横浜善光寺留学僧育英会は外国人留学僧をも援助してきました。アジアや欧米から来て日本で仏教学を大学院のレベルで研究している若いお坊さんには日本の社会や文化はどの様に見えるのでしょうか。高度な科学と技術を持つ豊かな経済大国とも見えるでしょう。親切な日本人

にも沢山会うでしょう。日本は江戸時代から明治維新以降にかけて外人アドバイザーを招き、国家総動員で近代資本主義に盲目的に驕進して、戦後新興成金の国になりました。しかし、中庸を説く仏の教えが後継者によってどう解釈されたとしても、富と宗教の関係はあまり論じられておりません。経済学者の中には日本の資本主義を批判する人もおりましたが、あくまで亜流であり、宗教上の観点からの考察批判ではありませんでした。とにかく、外国人留学僧は日本人の物質文明への異常なまでの執着心と世俗主義そして精神面の欠乏にも気付くことでしょう。これは日本に限らず先進国の特徴であります。

先進国での宗教離れと世俗化とは対照的に、回教は発展途上国において、すごい勢いで波及しています。教義の内容はともかくとして、回教徒の女性は回教徒の男性と結婚することを義

務づけられている事にもよります。稀に、同じ神を信ずるキリスト教とユダヤ教の男性との結婚だけは許されますが、仏教徒や他の異教徒と一緒にになることは禁じられています。これは回教徒の子孫を殖やすためで、ユダヤ教の女性が他宗教の男との結婚を禁じられているのも同じ様な理由に因るものと思われれます。回教徒の男性が異教の女性と一緒にするのは黙認されていいますが、結婚後女性が回教に改宗することが多いからでしょう。回教の強い中近東や東南アジアやアフリカ諸国の出生率が高いことを考えると、回教は急速に増大するでしょう。しかも、世界でキリスト教が着実に伸びていることを考えると、近い将来に、仏教人口が増える可能性は少ないでしょう。

しかし、宗教は人間一人ひとりの精神的な現象であるとすれば、信者の数のような量より個人の宗教の質の問題になります。しかも、どの

宗教が一番良いかが重要ではなく、どの宗教がどの人の宗教心に一番適しているかが問題になります。ヒンズー教のインドとか回教のサウジアラビアとかユダヤ教のイスラエルとかキリスト教の欧米と言った国単位ではなく、仏教徒が皆無状態の社会でも少数の現地人との宗教心を満たすならば、異文化の中の仏教も存在意義があるでしょう。

横浜善光寺育英会は内外の留学僧を通じて仏教学の向上と仏教の紹介のため、ゼロから始まり十五年間も続いてきましたが、これらの目的達成の為これからが正念場でしょう。